常山紀談

六

函番號 21 號
種別 図
稟番號 3218
月購入 月 日

919.5
338
Vol.6

備前藩 湯浅先生編輯

常山紀談

千鍾房
宋榮堂 製本

帙

常山紀談卷之六目次

一 山崎合戦の時堀秀政宝寺の山をとる事
一 森寺政右衛門武名ハ事
一 則武三大夫功名の事
一 瀧川一益厩橋を退く事
一 光秀愛宕山にて連歌の事
一 幸田彦右衛門つゞ母義死ハ事
一 志津ヶ嶽合戦秀吉智謀の事
一 堀七郎兵衛見切の事
一 志津ヶ嶽七本鎗ハ事
一 石川兵助戦死の事

一佐久間盛政生捕る事　附久右衛門安次源六郎実説の事
一尼子家の十勇士
一信雄長宅を誅せられし事
一平松金次郎始末の事
一水野勝成高名幷行状の事
一本多忠勝忠勇の事　幷忠信の暫の事
一榊原康政秀吉を誹りて札を立られし事
一初鹿傳右衛門が事
一秀吉　東照宮の御陣へ戦書を賜はる事
一東照宮蟹江御出陣の事
一東照宮の御軍器より依て蟹江城降参の事
一九鬼嘉隆蟹江の湊出船の事
一中村一氏紀州の一揆を追拂はる事
一竹中重治の事
一戦國の士功を讓る事
一羽柴勝雅敵を免さる事

滋賀縣立図書館
學校藏書印

常山紀談卷之六

備前國　湯浅新兵衛元禎輯録

○山崎合戰の時堀久太郎秀政士の子何ぐ[illegible]といへる者明智ぐ[illegible]ふ奉公して有しが光秀夜めいそぶぬざる内宝寺の山より兵をおろしあぐるとて謀ありし父れかくよ告やあくおひよりぐ敵味方とれと明日八一戰ふ及だんるもを欲きくる其書状を別秀政に見せるまバ秀政夜半に宝寺の山ふ打上り陣し待ち出るをいそで起き夜明ぐるに明智ぐ先を押寄るを秀政山上より鉄炮を打かけ不意に切かゝと追崩して一戰ふ利を得

○山崎に合戦に明智が先陣と護國公の先陣と戰をいどみ出
時に侍大將森寺改右衛門忠勝真先かけて敵を追ふて
森寺が馬印檜木笠あり明智が者共見て々々檜木
笠の馬ぢるし持せて大剛の者下知せしあさは目を
おどろかし姓名を兼らぬやと度々呼たりを秀
吉聞て々の軍森ちが一人の武名をうばはんとて柵の
故付ゝるたをりをあらへられきり
○山崎の軍に堀尾帶刀吉晴の士則武三大夫首を取て吉
晴の前に来る吉晴おりゝよりも出て世ゝと詞をか
けらまゝしゝば則武怒て首を提てさゝみよりかゝる時ハ
大將も目のくゝくらるゝ拍子に則武三大夫が取さるをよく
沙覽ゝと罵る吉晴もかくさ奴哉といつまで動を抽
て斬られしに曽の星を削るとり則武玄一文字に敵に
中にかけ入又首を取て帰る吉晴ハ赤則武ハ討死せんと
悔おもてゝ爲に則武来ばバ大に悦んで汝をさそに
ちゝ先生る刻賞せる條ふかしひしよりもといへる剛の
者ふいなべき詞にあるぞ遂にてあれ汝が二度乃
先ぐけ大きふすぐまゝよと義ぎられたり
○天正十年瀧川左近ハ監一益と信長の命により関東北
管領とゝく諸將に質をとり上野乃厩橋にありる処に
六月七日信長弑せ〻の変を聞て老臣ども事をかくさ
んといくども一益悪事千里とゝ諺乃秘せるに

能ハ[illegible]として上州嶺の城主小幡上総介信真鷹巣の城を攻る菓三河守信尚金山の城主由良伝治郎國繁館林の城を長尾但馬守顕長小股の城を渋川相模守義勝倉賀野の城主倉賀野淡路守景白倉の城主白倉左衛門佐藤岡の城主内藤大和守秋宣安中の城主安中越前守宗山の城主高山遠江守重光五閑乃城を五閑刑部小泉乃城主富岡六郎四郎石倉の城を長根遠殿丞大戸の城主大戸民部直光木部北城を木部宮内少利和田の城主和田右兵衛尉実伝業那波の城主那波對馬守宗元武州忍の城を成田下総守深谷の城主深谷左兵衛憲盛松山の城を上田又次郎政朝外の諸将を招き信長の変をつげ各乃人質を帰しいれ

上京して帰軍すべき旨をかゝる諸将大よ窓ゝ此一大事を告て人質を帰さまゝんとれよいうでう二心いでき人質を[illegible]て仰ハ役ふゝ[illegible]と[illegible]ゝ一益諸将の義心謝す[illegible]ハ何もれゝで小條の表裡定めて一益を討取て上洛をおしえべたゝむ此方より打向ひ一軍せんものをゝく城ハ図性の彦次郎忠往を置一万計の兵を率ゐて神奈川ハ押出に

一説ハ北條家より人質を渡ゝしゝと云送る一益吾信長の命を受関東の受領一戦をゝしゝやく城を出よゝゝ[illegible]ハ

ゝ今危ハ陥て何そ小條が下知ハ付べきやとて兵衛出せりゝもいへり

北條氏直果て小田原より兵をおこし武州児王郡本庄に
着て先陣は条安房守氏邦神奈川より寄せ一益八川
を後ろにして戦ふ大敵支へがたく討たる者多し一益厩橋ハ
帰ると其日討死せし人々は姓名を過去帳に書て黄金を添
寺に送りて供養し諸将をあつめ暇乞して酒宴し一益
鼓をうち兵の交を教る中のとうとひなれば金賀野淡
路守なごり今ハと呼とりとめやし終夜酌酔て太刀刀
取出し上州の諸将より引出物し懇に嘱を乞て六月二十日
厩橋を打出て各人質を帰しきれども皆請取ざるを
駅馬ホの事沙汰し乞を送りて笛吹嶺より登る時國人は
人質悉く帰し木曽路より帰京ス滝川彦次郎ハ一益が

長男三九郎二男八九を使ひ木曽路より帰る時一揆起りて八
九を奪ひとられしを一益が士古市九郎兵衛一揆を追掃ひ
八九を奪ひとりて一益と同じく長嶋に帰る
一説神奈川の合戦に八九生捕まりを古市追討て其
敵を切ふせ八九を奪ひ返して連れ帰りて笹岡
平右衛門津田治右衛門に留て討死しける其間に一
益兵を納て厩橋ふ帰ると笹岡平右衛門ハ一益の
武功度々に及て士大将となり武者奉行なり又酒宴
を倉賀野にての事ともいとなり
関東にて一益厩橋を引たるひとしるぬるとひ捨て賞美

〇天正十年五月廿八日光秀愛宕山の西坊にて百韻の連歌

ちはやふるあたごの下しるみ月かな　光秀

雲上までもなほ雲のなかりけり　西坊

花ぞかるなごれのあをせさくめて　紹巴

明智本姓土岐氏なれば時と土岐とよみを通りて天下を乱の意を含みて秀吉既に光秀を討ち後連歌を引大に怒り紹巴を呼天下をとる時は天下を奪ふのゝ意なりいまてらり汝をもざるやと責らるに紹巴其発句は天下をとれとよまるべ懐紙をもよまず愛宕山より雨降て紹巴涙を流して是を見るに懐紙を削て天下をとると書換る迹なりとやはみ乳ぞよも書かへ申とく秀吉罪をゆるされたり江村鶴松軍把まてあたごの下しるとも出さるとも光秀討ちたく後紹巴密に西坊に心を合せて制ち又始のごとくいめぐ下をとると書たり

〇織田信孝秀吉と弓箭をとる時伝孝の乳母人を人質小秀吉のもゆるに出し置まを磔にしてく誅せるかの乳の人母子は幸田彦右衛門と伝孝母共火刑なり是より前秀吉信孝母共出家をかゝはるに岡本下野守ハ同心して信孝に背きられども幸田ハ背ず幸田が母誅

せうらふ及て子の表右衛門より書を送りて我今空しく成てとゆめ〳〵欲くべうらふ親ハ必子に先らん習ひなり唯忠義を守りて君よなを背ぎ給ふなと云ハ

〳〵くまこバ聞人感じ入へり天正十一年四月十八日秀吉の先陣伝孝ハ地より責入る時幸田兄弟いさぎよく討死しうり

王陵が母ハ天下をさらしめすべき高祖の事を識れども只今危難より迫まる織田家より忠を盡せといへる真よあり

がゝ記こゝにあらんか

○佐久間玄蕃盛政柳瀬より中川清秀を討取りる時秀吉長濱より一騎がけ来らまるを志津が嶽

到まバ日暮ぬ陣の柵去る事二里計なり盛政使を以て早く軍を引られハ待てハ夜明ハ矢合仕るべしと言送りる秀吉哀て是より申さんこゆゝ

〳〵も家ハ明日いさぎよく軍をとげんべしとて使を返して後吾ハ怠らせ夜討をんとれ事ならん遠き異國の張良ハ高〳〵ん我を謀るべき者日本より有とハ覚えぬ

〳〵野より山まもかゞりを透なく林〳〵白日のめし佐久間ハ敵人馬の行程を急て疲まてる処へもとゝと押寄打破らんとおもひりるハ秀吉の謀より夜ハの支度をく

○志津が嶽の合戦より堀久太郎秀政兵を今ち出さんとする

○時其比堀七郎兵衛押留て曰勝家の陣より佐久間う陣
より使来るとて西疾引とれとの事なり若引取ハ
玄蕃ハ本の道をハ帰るべうしとてハ敵ハ近き所にて戦
有べし玄蕃引取ぬハ勝家必来て軍有べし此二つを
出べうぬて兵をうらぶして待るといふ玄蕃も退ぬ
柴田も進ざりしうらば勝家運尽ぬと云しが果して
敗北しぬ又志津ヶ嶽の事を老功の人に問しに勝家
此詞のごとく玄蕃引うらバ勝利を全うすべし玄蕃う言
のめく徐家押来らバ必敗軍すべきなり両将互に
拙策しく勝を失ひうとぞかくるる
○志津ヶ嶽ふて佐久間ヶ人数乱るべきを秀吉ハて近習ハ
人くに向て爰ぞ鎗を合せよと詞を懸られバ各競ひ
進む福島市松加藤虎之介加藤孫六郎・庁桐助作平野
権平脇坂甚内糟谷助右衛門七人なりと秀吉今
日の七本鎗ハ者とて呼まくも誰といふ事を知ぬ
其時指を折てかぞへられしハ前に進をうらうり是より
志津ヶ嶽の七本鎗と世に唱へたり中ふも福島ハ誰に進
て鎗を合せうる上首をうち出をうらバ五千石あたへられ
其餘ハ皆三千石宛へらまぬ福島ハ紙の切裂おるへ指物
加藤嘉明ハ紫ちろ清忠と紙ハ馬まん庁桐ハ銀乃
切裂えぬぬ平野ハ紙子の羽織糟谷ハ金の角取紙のえ
づるハ拵されうとぞ

○志津が嶽の前夜石川兵助と福嶋市松と口論し既に刺違ふべき体なりしを座に有し面々明日の軍に身を捨て高名を遂らるべきこそいとゝ石川面々のまて口も得明ざる市松何とてこそ槍先に向ふべき時日とが後影を見よかしと云捨て出るが直に柳瀬に趣て只一人真先に進みて討死しけり人々其勇氣いとめでたしとも怒る人戒とゝのいあへり秀吉石川が弟長松に歳状を与へらまこと其文曰

今度三七殿依違貳軍義濃大垣に入れ柴田修理亮勝家出張柳瀬欲遂一戦之時兄兵助先駆合槍合戦死抜群之攘動発於眼前見之尓雖為若輩一念兵助が壮志与秩千石向後愈可抽忠節者也

天正十一年七月五日　秀吉

石川孝松殿

とかくまてこそり

○志津が嶽に軍破まて佐久間を生捕来る秀吉見て汝ハ武勇逞し紀者なり助て國を与ふべし二心なくんやと問ふ佐久間冷笑ひ我に國を与へなば汝を生捕搦ん事今日我身の上に比べくせん新に恩を受るとも柴田を忘れんやと云に死すべきに及て大紋紅裡廣袖の小袖白帷子ふそ〻だきしく居らまに一生の終に風流を尽しこそ是一つに生なりとゝ云へば秀吉其尻ふかせられ

ゝバ大ゝ悦んで是を受くゝり委蕃廿四才にて
人をゝみあへり
柴田亡て後其従子佐久間久右衛門安次源六郎實政
兄弟紀州ゝ遁まゝ粉川法師三池をかゝゝひ河内寄
坂ゝ城を構へ後亦南河内天野山の國見を要害ゝて
度ゝ軍しゝるゞ遂ゝ秀吉小攻落さる後ゝ小田原に
入小條亡て兄弟金沢の称名寺ゝありと秀吉伺へ家
伯父勝家の為ゝ吾を仇とする志誅ゝ大丈夫といふ
だゝ今日本平均しぬるきバ心を改めよゝて安次ゝ方
五千石宛改ゝ一万石与へゝく蒲生氏郷ゝ附らる兄弟
氏々ゝ一禮しゝる時躓きゝるを人皆笑しゝば氏々

物の思慮なゝく汝ゝが奉公ぶりを彼ゝ読ぶる事ゝ
兄弟ともゝ侍の士ゝあゝざる扨をとゝ云まてゝり
○尼子家十勇士と世ゝ唱へゝるハ山中鹿之介 薮系茨之介
五月ゝ苗之介上田稲葉之介 尤道程之介早川鮎之介 川岸
柳之介井筒女之介 阿波鳴戸之介 破骨障子之介 あり
○秀吉信雄を打亡さんと謀て先伝雄の長臣岡田長門ち津川
玄蕃浅井田宮左衛門之郎を傷をゝ紀憑ゝ頼りくあゝて
後信雄ゝ自害をすゝめゝよはちゝバ恐あゝく行ふべゝと
泣くゝまゝ々り吟入ゝぜハ首を刎ん事危ゝ上神文を書ゝと
憂らる四人力あゝく兼あゝと云て起請文をまゝふゝり秀
吉も約を背ゝゝと神文を出されゝり是ハ一人ゝ力ゝらふ

べきを一図に招きくるハ信雄に告知らする若をて誅
誅せさせんとの謀なりと又皆秀吉に実に心服せずとも既に
神文を書くれど疑ひなく一和せべくべと思慮せるまてる
あるべし滝川素僧あり織信長呼出し四万石の地を
賜ひ身なれば長浜に帰て伝雄に斯と告やせば頓て三人を
誅せんとなく長門ハ飯田半兵衛玄蕃ハ土方勘兵衛田宮丸と
森源三郎と討ふを定めれるあり土方兼ねて長門をハ臣
に仰付られれへ打留やさんといふ飯田既に定まるうへハ
何の中条れあるべきそといへど信雄さるバ長門をバ土方討
れへ飯田ハ既に下知しられバ討るに図しまして長門を土方に
譲まるり土方が斯云ふに故あり土方ハ始度三郎と云る

が如くに遅しく胸ひろく毛甚熊のごとくて
勇猛の士に長門常に土方に倍まて殿ハ人に軽くしく
信せられて日比我を蹂まるるよと度云るを土方夫ハたを
ふれる又ハ汝の心ハ遠くるなんといへど長門いやくハ長門
をば必誅せるべし其時汝討手あるべきよたやすく討るべた
身よたるぞといへバ土方図て討るの仰を奉らんに此勇猛
なるで又誰うるべたと径るに長門仰に考てハ七胴
切落しるる脇指まて汝が頭を斬破んと云るに依く
初ハ中せるる天正十二年三月三日の禮に図田伝雄の家
に出るを相図とせられと図田其日ハ狐差を横さくて
進ミ出る伝雄射に造らせる鉄炮を見よとて指出し此

墓尾の穴ハ何の為ぞと問ふに岡田ハ一言うむく時土方
つと引組み岡田已をやといふまゝに組伏を七八寸抽
くまでも大力よ強く抱うまして抽もれさで初め合ふる処
を信雄土方放せ我自ら切んと詞を終らまゝ臣と共よ
斬せんとてもれさで信雄放ざれをいつまでも斬ずといて
まゝうば土方岡田を突をかゝ小脇差を抽て指通せ
バ伝雄すうさで切く殺されゝ津川ハ此騒ぎを聞て走
来るとゝるが信雄小行を刀を元延て切ゝ廊下の長
押ふ切付ゝを飯田傷より刺殺ゝ浅井をば森村
篇より是よりして秀吉と弓矢をとられゝ

○平松金次郎重之甲州の温井と同じく天龍川を渡る平松

先達て陸上上て船よ残まゝる役者温井よ無礼の事ゝて
忽ち切殺ゝ平松よ斬ゝいふもなくてとられバ
無礼する者ハ吾も捨置ゝて色も変ずば人ゝれ平松を
誅ゝるゝふ幾程たゝく長久手ゝ軍小平松と鳥井金次
郎と先を争うて鎗を合ハ平松ハ相手ハ森武蔵ち長可
の士山田八右衛門て始播州三木の城主別所長治よ仕へく
名高ク勇士なり平松肥ふゝく小男なりゝバ
東照宮ゝ仕ゝ走ゝり不自由なゝんとて常小笑ゝ
小其日御前よ進ゝ出不行歩者今日鎗を合せていと立あが
らゝて傍若無人のゝ程ゝ賞せられゝゝも不足小
おもひゝゝ前田利家ゝ士山田出羽守時平一命て秀次

に仕へしゝが秀次よりて一万石に禄まてきりうれを平松に
小幼し京に趣く時心者さ朋友に暇乞して立去りしを
聞召追〻討手を出させらるに大剛の平松ちれバとて弟一
番小渡邊半兵衛て河村善七郎大久保与一郎 坂部治部
段〻に追かけるに坂部伐井にて平松ハ久能へ行かに坂越に
遠州可睡齋 曹洞宗 の禅寺 に立寄と物語て坂部ハ兄三十郎に用
の事有て横須賀へ行とて打連しより道の別際にて久しく
待てと馬より下て暇乞すに坂部に松を一太刀斬るに
いでもとりうん切もづしに平松坂部が眉間を切坂部駭
くれどもさしもの者に落人あり打留よと呼ハるを聞
近所の郷民群て出るに平松可睡齋へ入るを取囲を

横須賀よりも池集て寺を取巻ども平松ハ爰に戻り
ざといつを小僧を捕て責問ふに平松何方へも逃る
者にあらずと云て腹切人として立出坂部三十郎に向ひ治
兵衛ハ誠に釈〻語れども不便ちなら者に加る火
を拂ひて是非なく切らるとり三十郎聞て治兵衛
浅〻と答ふ平松吾斬る極て助るべきや日比の交ひも有
とゝ云ハ刺ざりさといふに腹切と云三十郎仕錯せんとて
まてで平松治兵衛を吾〻に乞かけ今汝小首を討まんハ心よ
〻ゝとゝく同心をざるしとなり
又一説小平太ハ度〻口論の時後まつを殊に遠州牧井の
渡に舟して柏原彩の郎平松が後者を討るふ

て有られバ人々嘲笑ふ　東照宮ゆめ召し人ハ何とも
いへ平松が眼ざし剛の者なりと仰らるゝが果して長久
手にて勇り策ゝる中ふ平松茜の羽織を着十文字ハ
鎗を提すゝみ出池田家の軍兵ハ出中ふ陰を入ゝる
其後出仕の中にて諸士ふ向ひ吾胎内より厚恩を蒙み
ぶりふ一命を捨ゝと思ひしが今ハ思ひ捨るなし
誰にても出ゝれよ極切よもべし昔の金次郎とも思も
まして対面あゝ若ふ加ゝると大言ゝ吠ふ一人も答
る者なゝ平松が勇名高く写して先年天王寺勝曼ハ
鎗見殺塚の鎗備前八濱の鎗を高ゝ言傳られ平
生ぶ鎗ハ長ゝ世の人賞ゝり秀次一万

石にて招ゝ平松立退るを笑ゝ石小栗又市
渡邊半蔵河村吾七郎坂部治右衛を退ゝ出ゝ
岡崎へ早飛脚ふて木多作左衛門ふも御ふ知有平松終
ふ袋井ハ小ゝ可睡斎にて自害ゝ
○長久手ハ軍ふ水野忠重の嫡子勝成ハ月を病て曽を見ず
鉢巻ゝ見て汝ぶ曽ハゆゝ壺ふ志ゝと
罵ゝ父ぶ成ハ真先かけて首を取ゝ
五吾首を敵ふ奪ゝ二ツの中ふ馬引寄て新
乗ゝ鎧をあてゝ駆ふ出忠重あれハいかゝて太田重助
とゝ士をゝて呼帰れ耳ふも入ず又水野
喜右衛ゝ来ゝ勝成ゝ眺て

上の諸ハ学も入べし只今大軍ゟ中よりかけ入り功名せん時止まるとて引返して拵やうをといひすて秀次の将白井備後ちゃ陣ゟ突てかゝり曽呂をとりくゝせ帰る此日の一番首なり勝成あゝ若まて人を物とも せぬ忠重の心よ所ひ虚無僧となりて國〻をめぐりく武者修行せ後よ忠重死して東照宮ゟ勝成よ三州苅屋を賜ハり日向ちと称して大坂の時大和口の先陣として大功ゟ人なり 徴朱十万石を賜ひて後愈士よ下ゟ対をいやしくもべく士ゟ畏賤ハ志ものゝ主君となり従者となり互よ頼ミあひくこそ世ゟつ習ひなるべしされバ大事の時ハ身をすて忠義をなすなりそゝ汝ハ我をバ親と思ふれよ我汝〻ちを子と思ふんと常よ士よいとまゝなり年老て鷹狩ゟ時行歩かるゝ蒲園よのりく士ゟ番所よそハふるへたるよ下に居て年老ての鷹狩をとりくゝ鳥をとらん為よ行くゝ心ありての事ゟりと度〻いひく打過られきり或時鷹狩の所よく昔勝成よ仕へし士を見うけいふなりゝや我ゟ禄三百石なりしゟ立去く越前ゟく千石ゟ禄をゝ今爰よ来らまゝハいるよと向ゟ彼士仰の通禄ハ越前よりく増れへども殿の下をゝさなり愬よてなりうみなゝ禄まを換ぶく暇乞して帰りひぬとゝきゝ徴朱大よ悦び折よふまゝ思ひ出せるりとゝ即日ゟ禄を増与へらまゝりその後勝成隠居しく又鷹狩の時彼士ゟ家の門閉るを見て

いろふと問ふに義作守の心よ背く事あるく暇をえ去りぬ
と答へしかば彼者ハ越前の禄千石を捨く小禄の我家を去
るひく帰ひし者あるふいろ小作州ハ思へるやかくい勝成
と若紀州得過て武蔵社金川根笹流の弟子とそうり尺八
一本携へて虚無僧とそうて日本國をえぐろう或時ハ堂塔よ
夜をぬし或ハ野ふも山ふも日をくらし樵く小艱難ふあひ
人ふも離られしが一言虚妄をいふ事なく不仁のふるまひせ
ざりしかるや今福山十万石を賜ひぬ然まども下の情ハ
忠ふるのハこれ虚無僧ふりし故なりとも惜むべき士
を失ひぬるよ美作ハ下ゟ事ハ忠れぬそうしまべてよき
士ハ主君又ハ頭の下知ふも無理なる事ハ心服せぬくあるかの

過ぎうるも能士ハ二度も三度も知るぬ体して松已ぐるくハ
傍輩よ徳させんとものを美作の改事なげうきぐとく
泣まりるとうや

○東照宮小牧よ陣しておりしが秀吉兵ハを分ち中入
さとゆめし召敵の迹よ役うて向せるふ小牧よハ石川伯耆ち
数正酒井左衛門尉忠次本多平八郎忠勝をおさせるへ然
るよ秀吉大軍を出して長久まよ向ちれるを見て忠次ハ
秀吉の本陣楽田へ押寄火をかけく攻撃べしと云れども
石川秀吉後よ変有りとゆて弥怒くまなんと強て押へて止
めるり忠勝ハ秀吉の馬ぐるくを見るより僅よ五百計引
具し小牧をかけ出小川一筋隔て秀吉よ対ちるび長久ま

出して弛向ふ路ゆく足軽を進め鉄炮を打うけ一軍せん
とすれども秀吉人ざる体ゆく為合せて龍泉寺の前にて忠
勝馬を川に打入口を洗ふ秀吉これの鹿角の立物の曽を
着たる人大将と誰ぞ見知らんと問へば稲葉伊豫守道知る
一年姉川の軍に武者出立見知れなき多田八郎にてはとや
もあへぬに秀吉涙をはらはらと流し五百に足らぬ士卒を
かへて吾八萬の軍にかけ合さんとすれば千死に一生もなき紀ぞ已
御ふ道を隙どれば主君の軍に勝利あらせんとの志
勇と云忠と云深に類なき紀本多忠勝秀吉運強く八軍にかゝん
あらんを考を討べきにとく弓鉄炮を制せられを彰て忠
勝長久手に馳付きれば軍終て敵味方ともふんべこハい

ふといふ所に味方打猪小畑に入せるとゆきもみよりて
追付きり御馬の例に乗ひるくも小牧に捨さるひ
かゝる軍に合不申と申されば聞し召取あへず汝が形ハ我身か
とおもひ小牧に後に危きるなくてこそ軍にはは
勝きれと仰あるとと其後天正十八年秀吉北條を打亡し七月
廿六日野州宇津宮にて平八を呼きり忠勝ハ下総の廳南に
有るを急ぎ来る秀吉諸大将並居る中に呼出し然
より佐藤四郎忠信が曽を得させて若き四郎が忠義後世
まで語伝に四郎に劣らぬ人に見せんとやとの誰ぞ
いさまして答ふる人なし其時秀吉四郎ふまるれる者ハ平八
なり子細ハ去りしまりと長久手の軍物がたり忠勝の賞

審ふ云まして則曽を忠傷ふ賜ひたるれば忠勝面目身にあるを知地して出られるふ其晩又忠勝を招き儀の人を遠ざけ自茶を与へ〻よい〻も諸大将並居る中まで汝が武勇を褒挙るに八秀吉が恩なるぞや主君の恩といひまことと問ふ首を低く拙云ぶ頻よとられるまバ忠勝兼て涙よ流しハヤせ〻ん累世の主君北恩となるぶべ〻ぞよ非ざるやさまるば秀吉愈感ぜられ〻

一説ニ忠信乃曽を賜ひりまでも悦ぶ色なく〻いうやと

ゑんバいやとよ忠信武勇さのみ羨〻くもなく主君と仰ぎ〻九郎判官も吾爵位も同じ唯世を家ニ傳へ〻る廉角の曽ことそよられと云まて〻とそ後忠信の曽ハ二男忠朝ニ壊と康角の曽ハ嫡子忠政ニ譲らまし出るとやうなん廿曽ニ

おりゝ不やりうん廿曽ニ

○小牧陣の時榊原康政秀吉ハ事を謝て札ニ書織田家ニ向ひて弓を引事不義悪逆の至るとを呼ぶ立るを秀吉歯噛して いゝと康政が首をとらん者ニハ十万石の地を与へんとそ艱らまし〻其後 東照宮と和平して婚姻の約あり〻る始の使ニ康政を賜ハるべ〻と秀吉申されて京ニ上ぼり〻ふ秀吉對面して小牧ニ札を立る時汝が悪き首を一目ゑん事をのゝそひ〻ふ今鄙和睦ニ及べ〻其志を悦び思ふまり此事を直ニ云んが為ニ迎へ〻り小平太と呼んハいゝぶり叙爵然るべ〻とて式部大輔とハ此時よりそ

中に所備饗禮有て厚く馳走あり〻るとぞ。

○勝頼亡て後武田家の士多く東照宮に仕へ奉る前に領し〻る禄知を書て出されと仰出され〻ふ初鹿伯右兵衛ハ加藤駿河守が二男にて兄の源五郎ハ川中島にて討死し〻る伯右兵衛其禄を受継し〻故禄地を書て出し〻るに駿河守が二百五十貫の地を合せて出記せり駿河守が嫡子丹波三男を弥平次と云兄弟共に傳右兵衛ハ源五郎が禄をこそ申べられ後伯守が禄を合する事の有べきやと云事聞えて本領四百貫の〻下し給はる傳右衛門人ハ皆親兄弟の禄地を記し出して其侭賜はる〻ふ吾ひとりと不拙として御朱印に墨を塗て諂ふ様ゆゑにかく有れとりふを岩間大蔵右兵衛

なりと仰せ〻く禄を召放さる翌年長久手にて傳右衛門密に御旗本に来て先うけ三宅弥次兵衛と争ひて首を取伯右兵ハ内藤四郎左兵ハ傍に居り〻る中に〻ん〻やく云を其間十四計にて御覧せ〻られ傳右兵ハ連来まと伝られしうば御前に跪くいふ汝が無礼なれども〻軍の先がけしなりまバ申〻とぞと御詞に伯右兵涙を流し〻る時三宅先に臣を一番に名と御詞をかゝるせまくど伯右兵ハ拙き〻みて首を〻ゐとやられバ三宅が実なる志を感じさせられ〻

○東照宮の小牧に陣を秀吉二重湟の城に櫓に上りなんやとて高山右近大夫幸任を呼で小牧に書簡を送り一戦せんとそなり十三万に軍兵陣を整て押出し後に柵の木結くり引

退ざるを立せんいうよと云まゝ高山ハ器量上ゝ
小牧ようの者出必怒らせ給いんるを中来るべゝと云ども
秀吉増田長盛よ出籠を書せ長岡忠興よ敵陣の木戸ゝ
道よ立よと下知せゝる高山色を変ゞ仰せるとも行ぎ
制しゝる秀吉忠興ハ弓箭のたゞけしゝ所へハ見ひもよゝゞ
剛の者を使よせんと云まゝ忠興高山を睨てつと立て
るゝ乗竹よ書籠を挾ゝ乗行ゝ村者ゝる松原の小塚ハ
上ゝ押立ゝ帰るを見て秀吉悦ばるゝゝ小牧の体より
月毛の馬よ乗江の母衣掛ゝる武者出籠を取て帰るゝゝ
有て金ハ枇杷ゝの指物さゝ康毛なるゝ乗ゝる武者
書輪を作ゝさゝゝ元ハ所よ立ゝゝあれ来まて云れ

ゝゝバ忠興又馬よ乗弛行ゝく取帰るを秀吉披て憤ゝふ
東照宮の返書よハたゝく渡ゝる半ゝ重綱水野太郎作正重ゞ
出間ゆく其詞ハ後よ栅結て一足も引ずゝと云ひ定めゝく
軍あゝん事兎も角ものゝすゝん三河者下ゝよるゝゝで一足も
逃るとゆ事ゝ家ハも不存とて書ゝゝと秀吉読も終ゞ
怒ゝれるまゝバ高山されバ斯ハゝんとてゆゝる事よと居ゝけ
ゝゝ成ゝゆゝ秀吉冷笑ひ馬率出せひゝと乗僅四五騎ハ
ゆゝく松原の小塚よ上て鬱を打ゝ紀敵の大将ハ喰へと大音ふ
呼ゝるを小牧ようの唐冠の曽よ孔雀の尾ハ羽織ゝ者ゝるハ秀吉
よあゝすゝとて鉄炮をおかゝ秀吉天下ハ大将軍ゝハ矢
の中ゝ拾ゝハと云てゝづゝと帰られゝゝ

○尾州蟹江より瀧川一益中入さると告来る時祐筆そう通とつふ若沛出馬一つゝ成者也と云ゝる　東照宮此可の字を削と今日ふ於て八一字も大切と大敵を前ゝ置可出るとハおくれとり出馬するとハ甚時をぬうさあとと仰られゝと

○東照宮長久手の軍ゝ備せゝひ勢州蟹江の城前田與十郎を沛攻あゝんとて打向ハせゝるゆゑ加勢多く池入ゝると沛強じて敵いゝかゝも城中へ入よと仰らまゝを酒井左兵尉忠次兼て何とて押留ゝハあべやと申ゝ　東照宮いゝ様ゝ

ゝゝと沛尊あゝゝゝハ忠次城ハ堅固なゝ多勢こゝなゝば爭ゝ攻落さゝべきいゝかゝゝ沛云ゝひとゝ沛を宥召大将謀を云ゝゝゝゝゝと信ゝれゝるゝが甚後援兵の集来アゝゝ船を退拂

ゝゝ粮道を絶せゝゝバ粮忽乏しく成て城を渡ゝ降参ゝゝ

東照宮天正十二才の沛時なゝゝゝゝ

○蟹江ゝゝ井伊直政兵をゝゝゝ秀吉の舟ゝ大将九鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船ゝ蟹江の湊小漕入て打上て堤と隔て戦ゝんとゝゝゝ引退て船ゝ集ゝゝゝゝゝ入江の湊ゝ　東照宮ゝ兵船角形造といゝゝゝゝゝ模様ゝて左右ゝ乱株をうち高中ゝ取囲んゝゝ直政ハ追かゝる九鬼ゝ若ゝ多く討ゝゝ水主揖ゝゝ猛ゝ驚ぎて船を出し得ぎゝゝ処ゝ九鬼ゝ士村田七兵衛鉄炮ゝ茱を込間宮造酒亮ゝ舳先ゝて下知ゝゝゝゝ大音上て静ゝ相ぎゝんゝゝゝを両軍なゝを驚めて見物ゝて中ゝゝ九鬼ゝ若ゝひゝゝゝ船ゝ集組ゝゝハ村田ゝ船を捨てゝゝ

名人為の謀ゆゑにうち形て村田おりふ矢坪より中がりて弓矢傷
まつらバ九鬼が若き力を得浜炮を打ケ船を乗浮めく湊
を出よゆゑ

○秀吉小牧より陣を出し紀州の根来雑賀北一揆を押へんとよ
中村式部少輔一氏を岸和田城より置まつり紀州の一揆秀
吉大坂を打立とゆて二万三千計二ゆふ分まで一手ハ東の山際
より堺へ向ひ一手ハ淀和田より押寄るゆゑ雑の若者ども二陣
三騎城をおく寄手ハ向ひしかは士大将早川助右衛門毛
利左兵衛引帰まつて使をやるを一氏ゆてかゝる時進で行まつ
るゝ武者を引入とすゝまバ敗北まつるものよいざ打出んとて鉄蓋
ぶ峯と名付し曽の緒を乗出て先より進んぶる者共

芦毛の馬印をふりかへりて出てさゝやく殿ゆて出るく軍ハ勝るよ
とゆ祝ゆゑあれ一万餘の紀州勢より面もふり切掛ると打破て
七筋より引て逃るを追ふ一氏ハ三百計ゆて堂の池といふ所より扣て
先陣の帰るを待おくく堺海ゆゑ煙くゝゝ人ゆゑハ堺ハ向
ひゝゝ敵の返し来まつゝ荒手の大軍より掛合て戦人事ひ
えよゝ疾城より楯籠らんと口ゝゝいへバ一氏いやく退るゝバ
味方氣挫て打負なん一すも退く時ハ先陣を捨殺城とと
攻落さゝゝ一揆ハ何百萬もあれ先陣をゝゝ切崩まつゝバ
二陣ハ忽敗ぶ我より任せゝて敵の一図ふかゝりがゝ地
ノ理を料ゆ堂の池を前ゝく大敵を待まつる一氏馬を
ぶ悉く城へ乗れへ馬を引付て時ハ引退たきゝの起ゝゝと

て持ち腰くけ旗本三百計の勢鎗を膝の上ゑ立て扶ぎ
ア新蔡勘左衛門強弓矢継早乃手利なるゆ散々ゑ射ち
ゑ倒れ〳〵手負死人倒れ重り〳〵ゆ時一氏弓の者ゑ
羽壷を勧たゑ渡せと下知せられ〳〵ハ金指詰引詰射る
矢ゑあゞ矢なり〳〵一氏麾を取かゝまこといして立て黒
田如水ハ大坂ゑあり〳〵岸和田ゆ敵押寄ると聞子ハ長政十四
歳ゑなり〳〵岸和田ゑあれハいざすゝんとて七百計かく
敵の後ゑかけ来るを一氏見て急すゝみをあきさるんで切てかく
て退立ゝく八百餘の首を取さりめ水ハ長政いゑとなりゆ知ゑ
黄八羅紗の羽織着て麻毛なるゝふれり今朝討取り者を戴の
四方手ゆ付ゝく祝ゆるを見て悦ゝ事大方なゝど秀吉一氏

ゆ感状賜ひてゝり一氏ハ豊臣家諸将の中ゆも勝まゝ勇
れられバ加茂嘉明もゝゝ慕ひゝく吾子ハ明成を式部
少輔ゑなゝゝと也

○竹中半兵衛重治ハ美濃の菩提ハ城主なり後ゆ秀吉の軍
奉行なり謀略ゝ人なれども打見ゝゝ文ハ婦人のごゝ
軍ゑ陣ゆ時も猛威なる事れゝ馬の皮ゑゝく包める甲を着
木綿の羽織一ハ谷と名付ゝる曽の緒をゝめ静ゑとして
居々り重治向ふ度ごゝゝゑ士卒戦ゆて既ゑ備ゝなりと
勇ゝ行人なり重治或時軍物語せゝゝゑ子ハ左京いまゝ幼なり
ゝゝ座を立られバ重治軍ハ國の大事なり何方ゑ行ゝと問
則ゑ申ゝゝ答ふ重治笑ゑ溺をゝゝゝとも軍物語の大事ハ

を立てやあるといらまさりし

○稲葉治左衛門八美濃齋藤家の士戦場にて必ず先に独り進み出芒の如くなる所に居る者世人是を芒の治左と云ふ澤喜藏八美濃の徳飛弾に隠れなく若き頃より功名を芋がら畠の鎗沢一番なりと云を吾ふ八ばかりぞ稲葉ふなりと云て互に譲りて決せざ澤八吾早く進みぬるまでも稲葉ふが後ろの多をもむく像に先に乗込ぶり実八一番稲葉ふなりと云ふ人皆是を賞し奇と有吉武左が足軽鉄炮に鎗を持て鉄炮を持て上る者鎗を合せしが吾一番に上らず園部儀大夫が後ろの多をメるを見て出ぬ罪を記が一番と譲りしと因事にて戦ほよかり

士八ましなる事に成

○羽柴下総守勝雅の許に二藏三藏とて物しるいづれこの城にくの事にやあり下総る城より出く働き引えるる城敵付来る二藏三藏門を固めて揚簀戸を下しく敵をたてこえしより勝雅下知して門を明く敵二人を出して討えば近藤石見守加勢しづ女子細を問ひてこれされる八死地に入る敵なり是を討バ城兵後多死傷をべし打とあ出られバとて軍の傷敗にあづかるぞと答ふ石見守武功ハ人なりしに大に成ぶ

常山紀談巻之六終